

\*注：昭和59年10月、久保田さんが書いた文から抜粋・編集

(略) 明治42年3月、姉が養子になるために養父が私の実家を訪ねました。その時、私は道連れとなって旅をしたら楽しいと思ひ、実家を出ました。

当時は交通の便が悪く、5里ほど大八車に荷物を積み、養父と姉、私は幌かけ馬車で岐阜駅まで楽しくうれしく到着しました。駅で時間待ちをしている内に母が恋しくなり、姉と2人で駅の外に出て、養父の知らないうちに家に帰ろうかと相談していると、駅から養父が出てきて言葉やさしく慰めてくれ、今、大きな汽車に乗せてやるからと私たちの手を取り構内に連れて行ってくれました。乗った汽車は、今思うとまったくオンボロでした。家では見たこともない大きなあんパンを買ってもらい、嬉しいの旅行のつもりで姉とおいしく食べました。

連絡船に乗ったその当時は棧橋はなく、一度小舟に乗り、大きな船に乗り換えるものでした。船が揺れるので養父の背中にしがみつきました。連絡船は子どもでも頭がつかえるほど天井が低く、立つことができせん。子ども心に船とは知らず、変わった家だと思っていました。

北海道近くになると、また小舟に乗り換えました。細い板を渡して陸地に上陸すると、そこには黒煙がもうもうと立ち上る汽車が待っていました。ホームを離れると、岐阜県では見られなかった一面真っ白な雪に驚き、汽車の窓からの景色が珍しく、姉と話をしました。

どこまで行くのだろうと養父に尋ねると、まだ2つ3つ旅を続けるのだと言います。鈍行汽車で段々疲れてきました。名寄駅に到着すると18才だという青年(石塚彦三郎さま)が馬そりで迎えに来てくださったのです。長箱にムシロを敷き、座布団の上に座りました。足が冷たくて泣いたことを記憶しております。頭から毛布をかぶせられ、外は見られません。毛布のすき間から見ると、広い野山は一面真っ白、頭を上げると養父が寒いから顔を出すなと頭を押しつきます。

2日目に常呂の岐阜に到着しました。途中、現在の浜佐呂間で1泊(鈴木岩次郎さま宅)。その夜、鈴木さんのおばさんが私の帯を解いた時に、故郷を出る時に母が付けてくれた7銭入りの袋を見て、たくさんお小遣いをもらってきましたねと申されました。その夜はゆっくりにお布団の上で寝て疲れが抜けました。

次の朝、また馬そりに乗り、左右ともに林で1軒の家もなく、恐ろしい山道を馬そりで走り、やっと到着したのが現在地の岐阜部落。久保田家に到着と同時に待ちかねていた祖母(実母の母)と養母(実父の妹)が戸口に迎えに出て私を抱いてくれました。あのときの嬉しさはいつまでも忘却することができません。遠い旅を元気で来た頭をなでてくださいました。(略) 明治44年5月1日、久保田家の養女として入籍いたしました。